

## 明治期津軽地方における洋学受容の研究

著者	北原 かな子
号	1
学位授与番号	3
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/36845">http://hdl.handle.net/10097/36845</a>

きた はら こ  
北 原 かな子

学位の種類 博士(国際文化)

学位記番号 国博 第 3 号

学位授与年月日 平成10年 9 月24日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科(博士課程後期 3 年の課程)  
国際地域文化論専攻

学位論文題目 明治期津軽地方における洋学受容の研究

論文審査委員 (主査)

教授 畠 中 美菜子

教授 入間田 宣 夫

助教授 藤 田 緑

助教授 山 下 博 司

教授 長谷川 成 一(弘前大学)

## 論文内容の要旨

### I 本研究論文の目的

明治五年十一月、旧藩主の援助によって津軽地方弘前に設立された私学東奥義塾は、開学当初から洋書を揃えて外国人教師を招聘するなど洋学教育に力を入れ、津軽地方に洋学が普及していく際に中心的役割を果たした学校である。同校の洋学は、明治七年末に着任した第三代目外国人教師ジョン・イングによって大きく発展し、同十年にはアメリカの大学に集団で留学生を送りだすと共に、翌十一年に視察した文部大書記官西村茂樹が、その整った教育体制や生徒の実力において他県にも希な学校であると驚くほどの体制を築くに至った。

この東奥義塾で学んだ中からは、明治十年にイングの尽力で米国留学し、帰国後外務省に入り各国領事、大使などを歴任した佐藤愛鷹や珍田捨己、佐藤等と共に留学し、帰国後明治十七年から東京高等師範学校で英語を教えた那須泉、東京大学でエドワード・S・モースに師事し、生物学者となった岩川友太郎、明治の新聞界に論陣をはった陸羯南などがでている。また当時は東奥義塾の校風に憧れて他県から学びに来る人々もあり、その中には会津出身でアメリカ留学の後、明治のベス

トセラー小説『佳人之奇遇』を発表すると共に、政治家になった柴四郎（東海散士）もいた。その他、最初に留学した学生達の影響で米国留学し博士号を取得した学生達や、帰国後早稲田大学や北海道大学で教鞭をとった者、またはキリスト教布教で活躍する者など、その活動範囲は津軽地方のみならず全国に及ぶ。やや時代は下るが、東北大学理学部生物学科の基礎を築いた畑井新喜司、東大及びシカゴ大で学んで日本天文学会を創設した一戸直蔵、文学研究で知られる柳田泉も同校で学んだ人達である。

このように東奥義塾は多彩な人材を輩出し、特に草創期は公立教育体制が整わなかった青森県において啓蒙的役割をも担った学校であったが、私学ゆえの慢性的財政難に悩まされ続けた。特に明治十六年に津軽家からの補助金が停止した後は深刻な経営難状態に陥り、明治三十四年には市立に移行、大正二年に廃校となった。私立東奥義塾高等学校として再興されたのは、その十年後のことである。

本研究は、この東奥義塾を中心として展開した津軽地方における洋学受容過程を明らかにすることを目的とし、六章から成っている。各章のタイトル及び内容の構成は次のようになっている。

## Ⅱ 各章の構成

### 第一章 東奥義塾開学

本章は東奥義塾開学期の内容である。明治初期からの東奥義塾沿革関連資料の検討、旧藩学を直接継承した弘前漢英学校と東奥義塾との連続性、開学に当たって中心的役割を果たした人々、教育課程や塾則などの教育体制、当時の東奥義塾を取り巻く青森県公立教育体制、などの検討を行ない、最後に開学期東奥義塾の性格を考察している。

### 第二章 明治期東奥義塾所蔵洋書調査報告

東奥義塾には現在に至るまで明治期に使用された洋書二二五冊が残されている。本章では、東奥義塾洋学の傾向を知るため、この書籍を英語、オランダ語、フランス語、ギリシャ語の各国別に分け、そのうち英書を内容によって十八項目に分類した。また東奥義塾洋学を考察する一助として、同校に大きな影響力を持ったジョン・イングが寄贈していった書籍類も指摘した。

### 第三章 東奥義塾の洋学（１）—ジョン・イング着任まで

本章第一節では、明治六～七年に東奥義塾に在職したウォルフ夫妻、アーサー・C. マックレーについて述べている。また第二節は、東奥義塾洋学の流れを大きく変えることになった第三代目外国人教師ジョン・イングと旧弘前藩士本多庸一についてである。ここでは特にジョン・イングを支え

て東奥義塾の在り方に強い影響力をもった本多庸一の動向に注目し、横浜で伝道活動していた本多が帰郷し、東奥義塾に着任する原因となった背景に当時の政治情勢が絡んでいたことを述べている。

#### 第四章 東奥義塾の洋学（２）—ジョン・イングの貢献

本研究の中心となる、イングによって伝えられた洋学についてであり、基本的に本研究において新たに発掘したインディアナ・アズベリー大学所蔵英文資料と、東奥義塾に残されていた資料とを比較している。

第一節では、イング自身が書き残した、東奥義塾での教育方法に関する証言を基に、イング在職中にその原案が作られた明治十一年三月の教育課程及び教科書と、イング在学時のインディアナ・アズベリー大学教育課程及び教科書とを比較検討した。また、第二章で指摘したイングが寄贈していた書籍類が使用された背景も考察した。

第二節では、イングが伝えた事柄の中で、これまで殆ど注目されてこなかった「文学社会」を取り上げた。東奥義塾「文学社会」とは、英文暗誦や論説・討論を行ない、基本的に弁論を鍛える場であった。ここでは、イング在学中にインディアナ・アズベリー大学で盛んに行われていたLiterary Societyが東奥義塾「文学社会」の原型となったことを指摘し、イングが「文学社会」を伝えたことを示す一つの証拠と考えられる場面として、明治九年に天皇が東北巡幸を行った際の、イングと東奥義塾生による天覧授業の場面を検討した。また、この「文学社会」が、東奥義塾生達の英語力向上に貢献したこと、青森県自由民権運動の土壌となったこと、明治年間に東奥義塾だけではなく広く弘前市内に普及していったことを明らかにした。

第三節はキリスト教の普及についてである。イングは弘前到着直後から宣教活動を開始し、短期間に数多くの受洗者を出すなど、目覚ましい伝道効果を上げた。本節では、イングと同時期に弘前でカトリックの宣教に尽力していたフランス人アリヴェとの比較を通して、有為の青年達が多く集まる旧藩学を基盤にし、旧弘前藩士族階級から広く尊敬されていた本多庸一が通訳としてついていたイングの環境が、地方で伝道を行うには非常に恵まれていたことを明らかにした。

第四節は東奥義塾での女子教育である。東奥義塾の女子教育は、明治八年春から始まった。ここではイング夫人の書簡から東奥義塾での女子教育の様子を明らかにすると共に、同校では明治十一年の時点で、女性解放思想的な論説が書かれていたことも紹介している。

第五節はイングが離職した後に東奥義塾で教鞭をとった、ウィリアム・C. デーヴィットソンとロバート・F. カールについてである。東奥義塾の外国人教師は、イング帰国後も二代続けてインディアナ・アズベリー大学卒業生が着任した。ここでは、従来知られていなかったこの二人について、彼らの手稿及び覚書なども紹介しながら記述している。

第六節は、明治十六年前後の弘前事件及び東奥義塾弾圧についてである。ここでは東奥義塾教員

を中心とした自由民権派と旧弘前藩士族による保守派の、青森県政における対立であった弘前事件について述べ、本章において検討してきた東奥義塾の洋学が、結果として明治政府の弾圧及び津軽家の補助金停止という事態を招き、東奥義塾存廃問題を引き起こしたことを述べている。

## 第五章 津軽地方初の海外留学生達

本章は、明治十年、津軽地方から初めてアメリカ、インディアナ・アズベリー大学に集団で留学した、東奥義塾生達の軌跡である。

第一節では津軽地方初の米国留学が可能になった要因を、イング自身の書簡を基に、学生の選抜、資金計画、留学のための準備学習、イングの意図、の四点から検討している。ここでは、インディアナ・アズベリー大学カタログなど、本研究において新たに発掘した英文資料に加え、これまで津軽の洋学受容関連研究では注目されてこなかった旧弘前藩主津軽家の記録も活用した。

第二節は、インディアナ・アズベリー大学での学生達の様子である。大学所在地までの道中の様子、大学入学の様子、在学中の各学生の活動及び学業成績について述べ、さらに同大学での彼らの評価についても明らかにしている。

第三節は、最初の留学生達の帰国後と第二期米国留学生達についてである。ここでは、最初の留学生の帰国後について述べ、彼らの影響で明治十八年にやはりインディアナ・アズベリー大学に留学した学生達についても記述している。

第四節は、この章で明らかにしてきた留学生達の軌跡から判断できる、東奥義塾洋学の水準についての考察である。ここでは、当時の官費留学生達と比較して考察した。

## 第六章 アーサー・C. マックレーの活動

本章は、従来全く注目されてこなかった、東奥義塾二代目外国人教師アーサー・C. マックレーについての研究である。

第一節では、従来在職したのかどうかも危ぶまれていたマックレーが、実際に弘前に滞在したことを裏付けるものとして、彼が帰国後に著した『日本からの書簡集』の中から弘前城に関する部分を紹介した。

第二節では、やはり『日本からの書簡集』の中から東奥義塾の部分を紹介し、本研究で述べてきた草創期東奥義塾の洋学を、実際に指導を担当した教師の目を通して辿った。

最後に第三節では、これまで述べてきたマックレーの活動を、日米の文化交流という視点で評価できることについて考察している。

本研究論文における各章の構成は以上である。では、次に全体の要約を述べる。

### Ⅲ. 全体の要約

東奥義塾は、明治五年十一月に旧藩校の廃絶を命じる文部省布達により廃校必至であった、弘前漢英学校を母体として設立された。このとき校名は変わったが、旧藩学で購入した教科書などの学校財産だけではなく、教官組織や学生などもほぼそのまま東奥義塾へ引き継がれたと考えられる。

東奥義塾開学を可能にしたのは、旧藩主津軽家からの補助金である。また、その後の学校運営も必要資金のうち約九割が同家からの年額三千円の補助金によっており、財政基盤の点においては、旧藩主との結びつきが極めて強い学校であった。開学の中心となったのは旧藩学校最後の督学であった兼松成言、明治四年以降慶応義塾から英語教師として招聘されてきていた吉川泰次郎、旧弘前藩士族菊池九郎、成田五十穂等であるが、このうち実務を担当したと見受けられる若手の菊池、成田及び多くの若い教員達が慶応義塾で学んでいたことから、開学期のカリキュラム、塾則などの学校体制は慶応義塾の影響を強く反映したものとなった。また東奥義塾開学当時の青森県は公立教育体制が整わず、教員数も不足していたが、同校は公立小学校設立時に教師並びに生徒まで派遣し、県令自身が教員の人材育成のために東奥義塾存続を支援する状況であった。

以上のことから、開学期東奥義塾の性格は、次のように定義することが出来る。即ち、東奥義塾は、旧藩主からの資金によって成立し、かつ教材や教科書などを旧藩校から引き継いだ実質的藩校であり、その学校規則や教育課程は慶応義塾の影響を強く受けていた。また、なかなか教育体制の整わなかった明治初期青森県においては、公立小学校に教師を派遣するなど、きわめて啓蒙的学校としての存在でもあったのである。

東奥義塾では開学と同時に外国人教師を招聘するなど、洋学教育に力を入れた。最初に招聘されてきたウォルフ夫妻は、オランダ改革派宣教師であった。次いで東奥義塾に来たアーサー・C. マックレーは、メソジスト派日本伝道の初代統轄者であり青山学院大学設立にも尽力したロバート・サミュエル・マックレーの子息で、着任当時まだ大学生であった。以上の二人に続いて、明治七年十二月に第三代目外国人教師として東奥義塾に着任したのは、ジョン・イングである。このイングと、彼を助けて東奥義塾の経営に携わった本多庸一の登場によって、東奥義塾洋学の流れは大きく変わっていくことになった。本多庸一とは、旧弘前藩上級士族の出自で旧藩校稽古館きっての秀才であり、また後に内村鑑三を初めとして多くのキリスト教関係者にその人格を讃えられるほど、周囲から尊敬を集めた存在である。横浜のバラのところで伝道活動をしていた本多の帰郷には、会津藩出身の永岡久茂や旧弘前藩士族などの明治政府に対する抵抗の動きが絡んでおり、津軽地方の洋学受容も時の政治情勢と無縁ではありえなかったことがわかる。

本多と共に弘前に来たジョン・イングは、一八四〇年アメリカ、イリノイ州生まれ、一度軍隊に入隊した後、牧師を目指してインディアナ州のインディアナ・アズベリー大学で学び、首席で卒業

した人物である。このインディアナ・アズベリー大学（現在のデポー大学）とは当時インディアナ州最大規模の大学であった。大学卒業後にイングは妻ルーシーと共に宣教のため中国に渡ったが、四年にわたる伝道活動の間、洗礼を受けたのはわずか四人と成果は上がらず、イング夫妻は健康上の問題もあり帰国を決意した。帰国途中立ち寄った日本で東奥義塾関係者と出会い、その要請を受け入れて本多と共に東奥義塾に着任した。

イングは、東奥義塾に明治八年初めから十一年三月初めまで、三年余りに亘って在職した。彼は同校の学生達に「スカラシップ」や「文学社会」など、自分自身が在学した大学で行われていたことを伝えた。教科書やカリキュラムなどの教育体制も環境の許すかぎり母校と同様に整え、インディアナ・アズベリー大学カタログに掲載されている教科書と同じ書籍は、現在も二十冊ほど東奥義塾に残されている。さらに両校の教育課程を比較すると、例えば数学については教科書も進み方もほぼ同じであり、東奥義塾下等中学課程がインディアナ・アズベリー大学の予備科にあたり、上等中学課程は同大学の一学年から二学年程度に対応している。このように、明治十一年前後の東奥義塾教育課程は、かなりインディアナ・アズベリー大学の影響を受けたものになっており、慶応義塾の影響が強かった明治六年の開学時から大幅に変化していた。またイングは、時には大道寺繁祺など東奥義塾の教員以外の人物達とも岩木山麓に地質調査に赴くなど、単なる東奥義塾教師の枠を越えた活動もしていた。

イングが伝えた中で最も重要と考えられるのは、明治十一年三月に刊行された『東奥義塾一覧』に出てくる「文学社会」である。この「文学社会」とは、弁論を鍛えるため「講談、文章朗読、論説、討論、の四科を講習する」もので、選挙で選出された「会長副会長書記考校等」の役職を置き、その運営は議事法によっていた。「文学社会」の原型となったのは、インディアナ・アズベリー大学 Literary Society と考えられる。東奥義塾「文学社会」の組織及び会の運営方法は、インディアナ・アズベリー大学 Literary Society に非常によく似ていた。この Literary Society をイングが伝えた一つの証拠と見受けられるのは、明治九年天皇巡幸の際にジョン・イングが東奥義塾生に行った天覧授業である。この時の天覧授業は単なる通常の授業の形式ではなく、Literary Society の形式とよく似た形式をとっていた。イングはおそらく考えうる最高の晴れの舞台である天覧授業を、学生時代になじんでいた Literary Society の形式で構成したと考えられるのである。

この東奥義塾「文学社会」は、以下に述べる 1) 学生の英語力向上への貢献、2) 自由民権運動との関係、3) 津軽地方への弁論の普及の三点で注目に値すると考えられる。

イング指導下にあった東奥義塾生達は、例えば後述するように明治十年に米国留学した学生達をみても、アメリカの大学に進学しただけではなく、渡米直後から講演活動で生活費を賄うなど、その英語力の水準はきわめて高かった。こうした英語力を育てたその要因の一つに、この「文学社会」で「講談」として行っていたデクラメーション（名文暗誦）があったと考えられる。イング自身、

東奥義塾生達に暗記中心の教授方法をとり、イングが在職当時東奥義塾で流行していたデクレーションのテーマの中には、インディアナ・アズベリー大学Literary Societyのテーマと同じものもあった。東奥義塾生達はアメリカの大学生と同じテーマで練習していたことになるが、こうした優れた英文を数多く暗記する方法が、東奥義塾生の英語力向上に果たした役割は、決して少ないものではなかったと察せられる。

また福沢諭吉は、明治初年の日本人には大勢の人の前で話す演説の習慣がほとんど無く、自分の意見を論じることが少なかったと伝えている。イングが東奥義塾の人々に、自分の意見をまとめて自分の言葉で伝えるという、思想鍛練にも繋がる場である「文学社会」を伝えたのは、そうした時代であった。演説という言葉さえ未だ珍しいとき、東奥義塾生とその教官達は議事法に即して「文学社会」を運営し、論説を鍛え、討論の方法も練習した。町村制が施行された後には、学外の人々も「文学社会」に参加するようになり、町村議会運営方法について学んだ。そのうち討論のテーマも、東北開発などの時事問題が取り上げられるようになった。こうした中から、自由民権運動への機運が生まれてきても何ら不思議ではない。東奥義塾からは教員達を中心に民権結社共同会が結成され、自由民権運動が盛んになっていったが、その土壌とも呼ぶべき存在となったのは、イングが伝えたこの「文学社会」であったと思われる。イングは青森県自由民権運動の基盤を作ったと言っても過言ではなかったのである。

さらに「文学社会」は、「文学会」、「文学部」と若干名称を変更しつつ、東奥義塾の枠を越えて、弘前市内の劇場や、子供たちの剣道場にも広がっていった。明治年間を通じて、道場の文学部で弁論を鍛えた子供たちは多かった。その中からは、笹森順造のように後に国政に携わる人物も育っている。

この「文学社会」は、その重要性の割には従来あまり注目されていなかった。特になぜこの「文学社会」という発想や名称が出てきたのか、誰がこれを伝えたのか、という視点は皆無であったといってよい。本研究で指摘したとおり、この「文学社会」は明らかにイングによって伝えられており、しかもそれは彼が伝えた事柄の中でも、おそらく最も影響力をもったものだったのである。

キリスト教も、イングによって弘前並びに津軽地方に広まった。イングは弘前到着直後から本多庸一と共に伝道を開始し、約半年後には十四名に集団で洗礼を授けるなど、目覚ましい宣教効果を上げた。日本語をほとんど話せなかったイングに代わって、通訳であった本多自身も諄々と聖書を説いたと伝えられる。このとき弘前では、イングと同時にカトリック宣教師アリヴェも宣教活動をしていた。アリヴェ自身は後に東京外国語学校、司法省法学校で教鞭をとり、後に大審院判事や東京大学教授などになった学生達を数多く育て、日仏交流への貢献で明治政府から何度も叙勲を受けるなど、その優れた指導力を評価されていた人物であった。またアリヴェにも通訳を担当した日本人伝道師は付き添っていた。しかし彼は弘前にいる間、学校を開いても人材が集まらず、全くその



実力を発揮することなく失意のまま弘前を去った。アリヴェの伝道はイングとは非常に対照的な結果に終わったのである。

イングは弘前を去るまで少なくとも三十五名に洗礼を授け、弘前教会はメソジスト派の大きな勢力に成長していった。彼の伝道は成果をあげたといえる。しかし、それは東奥義塾という有為の若者が集まる学校と、本多庸一という類い希なる存在があつてのことであつた。イング自身、日本に来る前に伝道に打ち込んだ中国ではさしたる成果を挙げえなかったこと、また、卓越した指導力をもっていたカトリック宣教師アリヴェが、失意のまま弘前を去らなければならなかったことなどは、明治初期に地方伝道を行う場合、条件に恵まれなければ、成果は望みにくかったことの一例を示している。この明治八年前後の弘前におけるキリスト教宣教を巡る状況は、短期間で目覚ましい伝道効果を上げたイングの業績が、イング個人の資質もさることながら、その背景に実は非常に恵まれた環境があつたことを教えてくれるものでもあつた。

イング離職後も東奥義塾にはインディアナ・アズベリー大学から教師が二代続けて招聘され、東奥義塾は文部大書記官西村茂樹が驚くほどの体制を整えるに至った。しかし明治十六年、旧弘前藩士族保守派の抵抗、及び東奥義塾とキリスト教が結びつくことをきらった岩倉具視等の強い意向によって、津軽家からの年額三千円の補助金は停止した。原因となつたのは自由民権運動とキリスト教である。イングによって東奥義塾からキリスト教が広まり、自由民権運動の土壌も築かれたが、結果としてそれは、学校の弾圧にも繋がることとなつたのである。

これまで述べたように、東奥義塾はイングによってその体制も大幅に変わり、教科書から教育課程まで、インディアナ・アズベリー大学の影響を強く受けた学校となつた。こうしたイングの指導によって達した水準を示すと考えられるのが、明治十年に東奥義塾から同大学に留学した五人の学生達である。

この学生達は留学前、既にインディアナ・アズベリー大学予備科程度の水準はこなしていたと考えられる。さらにイングの事前指導を受けて、同大学古典コース入学に必要なギリシャ語とラテン語の学習をしていた。イング自身は学生達の実力を高く評価しており、全員が十分にアメリカの大学で通用すると考えていた。

イングによって最初に東奥義塾からアメリカに留学した学生達のうち、学校から選抜されたのは、珍田捨己と川村敬三の二人である。彼らの費用は東奥義塾運営資金を援助していた津軽家から出されたが、それ以外の佐藤愛麿、那須泉、菊池群之助の三人は、それぞれの家庭で渡米費用を整えた。このとき、旧会津藩から学びに来ていた人々も含めて、他にも何人か留学できる水準に達していた学生はいたものの、結局費用の点で断念している。おそらく留学を志した東奥義塾の学生達にとって、最も難問だったのは学力ではなく渡米資金であつた。

彼らの留学は、入学のための準備勉強から渡米後の生活設計まで手配した、イングの周到的な準備

によって可能になったものである。イング自身は学生達を母校で学ばせ、優れた宣教師にしたいという強い希望を持っていた。留学に関してのイングの貢献は、本来宣教意図に因るものだったのである。

学生達は明治十年七月二日に弘前を出発、同年八月二十一日午前十一時に無事大学所在地のグリーンキャッスルに到着した。この間の旅行は、見事なまでにメソジスト派宣教師達によって手配されており、この留学が単に東奥義塾からの留学というにとどまらず、メソジスト派によって開かれた留学ルートとしての性格もあったことが窺える。到着直後から東奥義塾生達の英語力は高い評価を受け、また彼等はその英語力を生かして生活資金の大半を大学周辺各地で行った公演活動の謝礼で賄った。年少であった那須泉は予備科一年、珍田捨己、川村敬三、佐藤愛麿の三人は新入生のクラスに入ったが、那須を除く三人は、在学中に正規の学業に加えて牧師になるための課程も履修している。

彼らの学業成績は極めて優秀だった。四人から少し遅れて渡米し、到着後間もなく亡くなった菊池群之助を除く四人は全員、在学中に数々の「優秀賞」を受賞している。珍田捨己はフランス語などの外国語に秀でていた。このとき培った語学力は、後に外交官として活躍する際に役だったと推察される。佐藤愛麿は優れた弁論家としての才能を開化させ、インディアナ・アズベリー大学内の弁論コンテストに代表として選ばれただけでなく、アメリカ人学生を抑えて優勝している。川村敬三も優秀賞を獲得し、那須泉は有能な弁論家としての評価を獲得すると共に、特にラテン語ではクラスでも最優秀であった。その学力及び生活態度によって、このとき留学した東奥義塾生達は現在でも同大学で、優れた留学生達との評価を受けている。

彼らは帰国後、佐藤と珍田がそれぞれ一度は教職についたものの、後に外務省入りし、語学力を生かして外交官として活躍した。珍田は四年間東奥義塾に在職したことから、東奥義塾からは彼の影響を受けてインディアナ・アズベリー大学に留学する学生達がその後も続いた。那須と川村は在米中の過度の学習で健康を損ない、残念ながら若くしてなくなった。

こうした明治十年に留学した東奥義塾生達の在学中の活躍の様子は、イング指導下にあった東奥義塾の洋学水準を窺わせる。明治十年といえはすでに多くの日本人が留学した後であり、津軽からの留学は時期だけ見ると決して早くはない。しかし留学も、海外に行くことで学問文化を習得することをその目的とする以上、注目すべきはその質である。これまで明治初期の日本人留学生については、国内の教育体制と海外留学とが実質的に連結し、単に行くだけではなく留学先で普通以上の成績を修めることができるようになったのが、明治八年の文部省派遣留学生達以降と考えられてきた。しかもそれは開成学校という、当時の日本を代表する教育体制の下で、恵まれた指導を受けたエリート集団にしてようやく可能になったとされてきたのである。しかし本研究で明らかにしたような、これまでよく知られていなかった東奥義塾生達の活躍ぶりは、従来の明治初期海外留学生に

についての認識に、新たな一頁を付け加えるほどの価値を持つと思われる。イングの指導下にあった数多くの学生が留学可能な水準に達していたことは確実であり、その中で幸運にも留学を実現したのは、旅費の確保ができた者だけだった。そして繰り返しになるが、東奥義塾から米国留学した学生達は全員、アメリカ人学生を凌ぐ成績を修めた。それは、当時のエリート中のエリートであった日本人官費留学生達に決して引けを取るものではなく、彼らを育てた東奥義塾は、全国屈指の水準であったと考えられるのである。

本研究の最後に、津軽地方洋学受容のもたらした日米文化交流について、第二代目外国人教師アーサー・コリンズ・マックレーを中心に述べる。

当初外国人教師を通して、津軽の人々が西洋の思想、学術、文化を受け取るだけであった津軽の洋学受容過程からは、やがて留学生達が海外に出ていき、日本の文化を大学周辺各地で語ることによって、相互交流的ベクトルも生まれてきた。

このとき忘れてはならないのは、これまで全く注目されてこなかったマックレーである。彼は帰国後日本論である『日本からの書簡集』を著すと共に、ニューヨークで数々の講演をこなすなど、日本を紹介するアメリカ人の一人として活躍した。なかでも彼の『日本からの書簡集』は、一八八〇年代のアメリカにおいて、本来の日本を知るのに最適の本であるとの評価を受けている。マックレーは其中で、東奥義塾生達の様子など弘前時代の記述に多くの頁数を割き、東京、京都と赴任地を替えても事あるごとに弘前時代と比較した。この本からは、日本について語ったマックレーが日本観を形成していく過程で、初めて教鞭をとった東奥義塾や津軽での経験も少なからず生かされていたことが伝わってくる。そしてこの彼の記述は、現在の我々に、実際に東奥義塾洋学教育を担当した教師の目に映った、明治初期弘前や東奥義塾の姿を伝えてくれるものともなっている。

従来マックレーはその名前すら正確に伝わらないなど、きわめて影の薄い存在であった。しかし、本研究で明らかにした彼の活動は、津軽の洋学受容過程から日米の文化交流にも繋がる広がりが生まれていたことを示している。彼もまた津軽地方洋学受容過程の中で、再評価すべき人物の一人と考えられるのである。

これまで述べてきたように、津軽地方における洋学受容の過程には、様々な要素や現象が多岐に顕れる。ただその根本にあるのは、やはり、教育によって地方の近代化と発展を実現しようとする旧士族達と、旧士族達の学校を基盤にして布教を図ろうとする宣教師達の意図が主要な要素である。その両者の結節点が、東奥義塾であった。

おそらくイングが着任しなかったら、東奥義塾は慶応義塾の影響を受けた開学時の路線で進み、結果はかなり違ったものになったと思われる。そのイングにしても、優秀な学生達が集まる、実質的藩学としての存在であった東奥義塾は、彼が影響力を及ぼしていくための必要条件であった。

日本開国の後、伝道の可能性を求めて続々とやって来た宣教師達の懸命の努力にもかかわらず、

日本はキリスト教国家にはならなかった。これと同じように、東奥義塾でのイングの尽力も、たとえば優れた日本人宣教師にしようとして留学させた学生が、結果として外交官になるなど、彼本来の意図であったキリスト教布教とは、必ずしも一致しない結果をも生みだすことになった。しかし、本研究で明らかにしたように、彼によって伝えられた数々の事柄は、東奥義塾だけではなく津軽地方にも浸透していった。なかでも「文学社会」の果たした役割は、最も重要なものであったと考えられる。そしてイングの努力によって全国屈指の水準となった東奥義塾から育った人々は、それぞれの立場で日本の近代化に貢献したのである。

## 論文審査結果の要旨

- (1) 本研究論文は、明治前期、弘前の私学東奥義塾を中心として展開した津軽地方における洋学受容の過程を明らかにすることを目的としている。主として外国人教師が担った同校の洋学教育の実体を克明に追跡調査することによって、本論文は近代前期の日本における近代化・近代教育史の問題に新しい視点を加えるものであり、同時に当時の日米の文化交流の一端を明らかにしようとするものである。
- (2) 本研究の大きな特色と強みは、日米双方の史資料の発掘とその整理、解釈にある。東奥義塾に残されていた未整理の所蔵洋書の調査に取り組んだ他、三代目外国人教師ジョン・イングの出身校インディアナ・アズベリー大学（現デポー大学）所蔵の資料、アメリカ各州の州立・公立図書館からの資料の蒐集を精力的に行ったことは、本研究の中心部分を支えるばかりでなく、今後の研究の基礎を提供するものとして、大いに評価されるところである。これらの史資料を駆使した本研究には数々の新しい知見が認められる。(i) イングが導入した「文学社会」の制度はこれまで殆ど注目されることがなかったが、本論文では、これがイングの在学中のインディアナ・アズベリー大学で行われていた Literary Society を原型とするものであることをつきとめた。さらにこの「文学社会」が青森県の自由民権運動の土壌となった点を明らかにしたことは、日本近代史研究に対する一つの貢献である。(ii) 東奥義塾の教育方針が、当初の慶応義塾を模範としたものから、外国人教師たちの努力によって劇的に転換した過程を示したが、これは従来の研究史にないものであって、近代前期の教育史における大きな成果である。(iii) 東奥義塾出身の留学生のアメリカの大学での活躍ぶりを克明に跡づけ、外国人教師の教育の内容と質を多角的に解明した。(iv) これまでまったく顧みられなかった二代目教師 A. C. マックレーの帰国後の著書を取り上げ、一外国人が見た当時の弘前、そして日本を紹介した。
- (3) 本論文は東奥義塾のみに密着しすぎた嫌いがあり、他の地域や同種の学校の洋学受容と比較し

て論じられていたなら、津軽地方のその特色が一層鮮明になったであろう。誤記が目立つことは、論文の内容が優れているだけに残念である。しかしそのような不十分な点を残しながらも本研究論文の価値は大いに評価されるべきものである。従来のお雇い外国人教師の研究が開成校など最先進地域を対象として行われてきたのにたいし、東北の津軽地方を通じて、外国文化の受容と外国人教師による教育の実体を解明したことは、この分野の研究を大きく前進させるもので、画期的な価値を有しており、本研究論文は博士の学位論文として適当である。

以上述べてきた通り、本論文は提出者北原かな子が、自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。